

アーサー・ウェイリ―英訳源氏物語の諸問題・第二部・上*

—賢木・花散里・須磨・明石—

井上英明

本稿はさきに報告した『アーサー・ウェイリ―英訳源氏物語の諸問題』(『比較文学年誌』第一号 早大比較文学研究室 昭和四十年三月刊)の続稿をなすもので、考察の対象は英訳本第二部の前半『The Sacred Tree (賢木)・The Village of Falling Flowers (花散里)・Exile at Suma (須磨)・Akashi (明石)』の四帖とし、原作のテックストはウェイリーの依拠した『湖月抄』本に従う。なお、後半『薄標』から『松風』までの五帖は、すでに前掲の早大『比較文学年誌』第二号(昭和四十一年六月刊)に書いた。前半・後半、はからずも相前後して発表することになったが、かれこれ併わせ参看願えれば幸甚である。

英訳文検討の方法は、旧に依って下記のごとくするが、わたくしのもちいたこれらの分類法は、ウェイリーみずからの翻訳態度からある程度の必然性をもって帰納されるものであり、またその意図するところもさきの論文で詳説したので、ここでは逐一解説をつけない。

I 適訳 Adequate But Not Literal Translations.

a 解説的 Explanatory (Expanded; Contracted).

b 心理分析的 Psychoanalytical.

II 不適訳 Inappropriate Translations.

a 解釈 Due to misinterpretation of word meaning and usage.

b 誤読 Due to misreading.

c 文脈 Due to misinterpretation of context.

d 改訳 Due to departure from original Japanese.

III 歌の訳し方 Translation of "Uta."

a 韻文形態 Verse form.

b 会話形態 Conversational form.

c 叙述形態 Descriptive form.

IV 欠訳 Omissions.

I 『適訳』

a 「解説的」―拡大化

原作を英文に訳し得て十分ではあるが、かならずしも原意に忠実ではない例で、『ウェイリー源氏』の全体を特徴づけるものである。し

たがって細大洩らさず例示するに堪えないが、いまいくつかの典型的な箇所をひく。

(1) 殿上のわかき公達などうちつれて、とかく立ちわづらふなる庭のたたずまひも、げに艶なる方にうけはりたる有様なり。(賢木 p.5

00) 有川武彦校訂『増註源氏物語湖月抄』上巻による。以下同じ。

但し、適宜に仮名を字に改めたところがある。

The garden ^① which surrounded her apartments was laid out in so enchanting a manner that the troops of young courtiers, who in the early days of the retreat had sought in vain to press their attentions upon her, used, even when she had sent them about their business, to linger there regretfully; and on this marvellous night the place seemed consciously to be deploying all its charm. (p.194)

野宮の美しい庭園に若い公達が集い来てたたずんでいる場面であるが、まず「庭のたたずまひ」の説明が英訳①の部分である。つぎに「公達」の説明が②である。さらに、なぜ公達が「立ちわづらふ」のか、この説明が③の後半 had sought in vain to press their attentions upon her の部分と④とで尽くられている。最後に、「げに艶なる方にうけはりたる有様なり」が④である。こうした解説的説明文の補足はウェイリーの随所に用いた方法で、登場人物の外貌・動作の描写になると一段と具体的である。例えば、

(2) 御(兼)としのほどよりは、おかしうおはすべきかなと、ただならず。(賢木 p.504)

The girl had begun to interest him. No doubt she was precocious in charm as well as intelligence, (p.196)

「うたがひもなく彼女はなまめかしきは勿論のこと、知性の方でも早熟だった」であるから、「彼女はとくに源氏の関心を惹きはじめていた」のである。

(3) 御(兼)さまも、げにぞめでたき御さかりなる。おまりかなる方はいかがあらん、をかしうなまめきわかびたる心地して、見まほしき御けはひなり。(賢木 p.516)

She was at the height of youth and good-looks; lively, graceful, confiding. Indeed, save for a certain light-heartedness and inconsequence, there was nothing in her which he would wish to change. (p.202)

「めでたき御さかりなる」という抽象的な言いまわしが、英訳では「彼女は若さと美貌の真盛りであった。いきいきとして優雅で自信にみちていた」となる。つぎの「をかしうなまめきわかびたる心地して」までを含めての訳である。「おまりかなる……いかがあらん」、つまり彼女の欠点の方は、「ほんとうに何とも名状し難い軽率さと論理に弱い点を除けば、源氏が彼女に改めてほしいと思うものはなに一つなかった」となるわけである。

(4)例の命婦してきこえ給ふ。(賢木 p.544)

He was standing outside her curtains-of-state. This answer was not spoken directly to him, but brought by Onyobu, her maid. (p. 215)

藤壺はつづもの命婦をして源氏に返事をさしあげたのであるが、そうしなければならなかったのは、源氏が「彼女の簾の外に立っていた」からである。

(5)親王はあはれなる御物がたり聞え給ひて、暮るるほどにかへり給へり。(須磨 p.583)

His stepbrother now fell to reminding him of scenes in their common childhood, and it was already growing dark when he left Genji's room. (p.235)

「あはれなる御物がたり」といふたばくせんたる表現を英訳は、「二人に共通して存在した幼年時代の情景を源氏におもいおこなせる」としている。

(6)今はと世を思ふ給へはべる程の、うなまつらさも、たぐひなきことにごそ侍りけれ。(須磨 p.586)

……But I would now have you know that the unparalleled ferocity of my enemies has at last driven me from the Court. (p. 236—7)

朧月夜尚侍にあてた源氏の消息の一節。原文は、「いまはこれまでと、この世を思いあきらめてしまふとき、情なきもつらさも私には比類のないことごとくございます」という意だが、英訳は一変して強烈な印象を与える。「私の敵の比類のない残忍さがとうとう私を都から追いはらってしまったことを今こそあなた知らせたいものだ」。源氏のセリフは苦悩のさなかにあっても、なお連綿として優美であるが、英訳されると物凄く憤激にかわってしまうのである。

(7)紅葉のやうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなどみ給ひつつ、ふるさともわすれぬべく思さる。(賢木 p.529)

「秋の野のいとなまめきたる」には引歌がある。したがって英訳は、*The maple leaves in the surrounding forests were just turning and he remembered Sojo's song written in the same place: 'Proud autumn fields'……となまめきたる。proud autumn fields からついで、* 遍照の歌は、「秋の野になまめきたる女郎花あながしがまし花も一時」(古今集 卷十九)であるが、「同じ場所でしたためられた歌」とも訳し加えているので、同じく遍照の「雲林院の木のかげにたがずみてよみける」という詞書をもつ一首、「任人のわきて立ちよる木のもとは頼む蔭なく紅葉散りけり」(古今集 秋下)にもイメージをかさねさせているわけである。かくして、秋歌のレトリックをさりげなく踏まえた地の文の訳は、いずれも周到であるが、こうした配慮はつぎの例にもみられる。

(8)今日の講師は心ことにえらせたまへば、薪いれこるほどよりうちほじ

め、同じうぐいこの葉も、いみじうたふとし。(賢木 p.542)
 The readers of this third day had been chosen with especial care, and when they came to the passage: "Then he gathered sticks for firewood and plucked wild berries and the fruit of the mountains and trees," the words that all had heard so many times before took on a strange significance. (p.214)

「薪こる」は『法華経』の提婆達多品中の句で、行基の「法華経をわが得し事は薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」という歌を加陀にして行道があるのだが、英訳は下線で示したごとく、一首の内容よりもむしろ、原拠となった『法華経提婆品』の「採薪及菓蔬」(『河海抄』所引)を訳して、この中宮法華八講の実際のシーンを現前させている。以上は、拡大化の訳例である。

—— 縮約化

内容上、あるいは修辞・文脈の上からまわりくどくて欧米人に理解されにくいと思われる箇所は大胆に縮訳されている。

(1) ほどなく明けゆくにやと覚ゆるに、只ここにしても「宿直申さぶらふ」と声づくるなり。(賢木 p.516)

Suddenly he heard people stirring in the corridor outside and for a moment thought that it must already be morning. (p.202)

近衛司の夜警が時刻を告げるのだが、その告げ方が「宿直申さぶら

ふ」という独得のいいまわしでは、かりに英訳しても理解されるのに困難であろう。ウェイリーは「廊下で人々が起きているのをきいた」として省略に付している。つぎに、こうした会話の部分の叙述体に改めて簡約化したやや複雑な例を引く。

(2) 「今しばしかくだにあらば、波にひかれて入りぬべかりけり。たか塩というものになん、とりあへず人そこなはるるとは聞けどいかかることはまだしらず」といひあへり。(須磨 p.631)

Sudden high tides had often before done great damage on the coast, but it was agreed that such a sea as this had never been seen before. (p.254)

突如、須磨を襲った暴風雨の中で、源氏の供人たちの感乱した叫びである。『湖月抄』本文は右のごとく連続して書きくたしているので、供人は単数にとられてもいたしかたないが、おそらく右の一条は、末尾に「いひあへり」とあるので、数名の供人たちによって断続的に叫ばれたものであろう。山岸徳平博士の岩波古典大系本のこの箇所は、五人の供人のセリフに分割されているため、場面を一そう迫真あるものになっている。実はこの一節は、

供人甲「いましばしかくだにあらば……」

供人乙「波にひかれて入ぬべかりけり！」

供人丙「たか塩といふものになん、とりあへず、人そこはるゝとは

聞けど……」

供人丁「いとかかることはまだ知らず！」

といったぐあいには、異調な短切句が連続的に集中し、特異な切迫感を出しているのである。とすれば、英訳の「以前この海岸には、突然高潮がおそったたびたび大きな損害を与えたが、眼下のような海はこれまでに決してみられたことはないということだった」ではいかにもその足りない。『源氏』の全体のリズムはゆるやかではあるが、こうした迫力あるセリフはなんとしても生かしてもらいたいと思うのである。

(3) 宮はものをいとわびしとおぼしけるに、御氣あがりて、なほなやましようせさせ給ふ。(賢木 p.520)

Fujitsubo herself remained in much distress both of body and mind throughout the night. (p. 204)

「いとわびし」「御氣あがりて」「なやましよう」などは、源氏が忍びこんできて心身悩乱する藤壺の心理状態で、兄の兵部卿宮や中宮の大夫に密会の現場が露見するのではないかとという恐怖もあり、すこぶる深刻な条である。英訳はやはり平板に処理された憾みを遺すが、ストーリーじたいの進行もいそがなければならなかったであろう。

(4) このもかのもと、あやしきしはふるひ人ともあつまりぬ、涙をおとつてつみたて給ひぬ。(賢木 p.466)

The country people from far and near crowded round the gates to see him go, uncouth figures strangely gnarled and bent. (p. 210)

雲林院界隈の人々が源氏の帰京を見送るところである。原作は、落涙して見送るとあるが、英訳ではこれが略されている。もっとも後文の「ほのかなる御有様を世になく思ひきこゆべかめり」を、……many were moved to tears. として補ったかにみえる。しかし、「落涙」は総じて生理的事実としては訳されない傾向にある。このことは第一部検討の際、すでに指摘したところである。『源氏物語』における「涙」は、アイヴァン・モリス氏が発言しているごとく、「弱さを示すのではなく、生命の美とパトスへのセンシビリティをあらわす」ものだからである。(Ivan Morris: The World of Shining Prince; 1964: VI)

b 「心理分析的」

作中人物の感情の内面を分析的に記述した例で、原作の文体とは対極的な位置を示す。

(1) はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひたまへるさま、にはひ似るもなくめでたし。(賢木 p.498)

An evening moon had risen and as she saw him moving in its gentle light she knew that all this while she had not been wrong; he was indeed more lovely, more enticing than anyone in the world beside. (p. 193)

「にはひにるものなくめでたし」をかなりくわしく訳し、壮麗・典雅な源氏の姿態に恍惚となっていく六条御息所の心理の内奥にまでたぐっている。すなわち、英訳では源氏の卓絶した「美」が that all

this while 以下で、源氏との誤ちによる彼女の罪障感を圧倒し、かき消してしまふのである。

(2)あをうまばかりぞ、猶ひきかへぬものにて、女房などのみける。
(賢木 p.547)

Of the usual New Year offerings from the Palace only the white horse had this year arrived. The gentlemen of the house could not but remember how at this season in former years princes and courtiers had thronged these halls. (p.217)

桐壺院崩御後、天下の権勢は左大臣から右大臣一統に移り、中宮藤壺は出家し、三条宮邸は年かわつても憂愁の色が濃い。正月七日の「白馬ばかりは、やはり普通りの慣例をかえないもので、中宮付の女房たちはみるのであった」とかう一節。英訳は、女房のこの時の感懐にたちいる。The gentlemen of this house 以下で、「邸の女房たちは往年のこの時節には親王、上達部が大広間に群をなしたことを憶い出さずにはいられなかった」としているのである。

(3)人しれず危ふくゆゆしう思ひきこえ給ふことしあれば、我にその罪をからめてゆるしたまへと、仏を念じきこえ給ふに、よろづを慰め給ふ。(賢木 p.549)

藤壺が源氏との不義の子に対する罪障感から必死になって仏に祈るところである。さりげなくかかれたこれだけの文を英訳は迫力ある筆

致で叙している。英文は長くなるので割愛し、いまその大意を辿ると、「若き皇子の人生はいかなる危難にさらされるのか。この法華八講 (Incessant Hianies) を行なうようにたのまれた人々はよもや感づきはしまし。だが、彼女自身の祈禱は一そうあからさまなものであった。万一、皇子の出生の真相が知れたならたちどころに襲いかかる破滅から、この若き皇子を救ってくれるよう、彼女はくりかえしくりかえし仏陀に願をかけた。もし、天罰をうけなければならぬものなら、この子よりもむしろおのれ自身の上にふりかかってくれるよう心底から祈った。そしてこうした祈りはすくなくとも彼女にいくらか心の落ちつきをもたらすという効果を生んだのだ」となる。藤壺懸命の祈りが、克明に分析されている。最後に一つだけ、こんどは可憐な女心の例をそえておく。

(3)めづらしきにそへてよそにめなれぬ御様なれば、つらさもわすれぬべし。(花散里 p.568)

源氏の来訪に「つらさもわすれた」花散里。では、彼女の「つらさ」とは？英訳はつぎのように説明する。she forgot to take offence either at his having visited hers sister first or having taken so long in making up his mind to come at all. (p. 228) したがって彼女の「つらさ」とは、「源氏の君が先にお訪ねしたのは(自分じゃなくて)お姉さん、お越しになるための決意にたいそう手間どったこと」だったのである。

II 『不適訳』

a 「解釈」

言葉の意味・用法の解釈で、明らかに不適訳と断定せざるをえない例。

(1) 御かへりあり。宮の御をば女別当してかかせ給へり。(賢木 p.503)

...an answer came. It was not from Rokujo but from the Yirgin herself, and had been dictated by her to her aunt who was acting as Lady Intendant: (p.196)

「宮の御をば」は、「斎宮の御返事をば」の意で、「伯(叔)母」ではない。したがって、to her aunt who was acting as はなくもがなである。

(2) 女君は日比のほどに、ねびぢなり給へる心ちしづくとたうしづまり給ひて、世の中いかがあらんと思へる気色の(賢木 p.533)

It seemed to him when he was back in his palace that Murasaki had in these last months become far less childish. She spoke very seriously of changes at Court and showed great concern for his future. (p.210)

「世の中」の解釈で、ウェイリーは「当代になりて源氏時にあひたまわぬことを思へる世」という『細流抄』の説を汲んでゐるかにみえるが、ここはやはり「源氏と自分との夫婦の中」とした方がよい。この場面での源氏は、紫上をみしおひて藤壺や齋院などの事をなまむ

に思い乱れる「あいなき心」でゐるからである。

(3) 夏の雨のどかたふりて、つれづれなるころ、中將とるへき集共、あまたもたせてまゐり給へり。(賢木 p.552)

The summer rains had set in, and one day when a steady downpour made other amusements impossible Chujo arrived at the palace with a great pile of books. (p.220)

「のどかたふりて、つれづれなるころ」を「間断ない豪雨が他の娯楽を不可能にした……」では、王朝貴族のしごくのんびりした閑暇の気分がたわらなれないと思うのであるが、如何なものであろうか。

(4) はしのもとのおうび、けしきはかり咲きて……(賢木 p.553)

The rose-trees at the foot of the steps were in full bloom... (p.220)

「はしのすしはかり」を「満開だった」となせなければならぬのか。けしきはかりに咲きそめてこそ、後文の「春秋の花さかりよりも、しめやかにをかしき程なる」という一文が生きてくるのである。

(5) すのこなどに、わかきわらへ、所々ふして……(須磨 p.580)

Some of the little boys who waited upon her were sleeping on the Verandah. (p.233)

孤園の西の対(紫の上)に夜もすがら伺候するのは「少年たち」より「女童」の方が適切であろう。このことは『若紫』の巻に出てくる「犬君」の場合でも触れておいた。(前掲『年誌』第一号)。

(6) 帥宮、三位、中将などおはしたり。たいめんし給はんとして、御道衣など奉る。(須磨 p.502)

Later in the day his half-brother Prince Sochi no Miya and To no Chujo called and offer to help him dress. (p.234)

「たいめんし給はん」も「奉る」も無論主語は源氏である。なかなか「奉る」は動作の主を高めて待遇するいい方で、衣冠を身につける意の他に、車・輿・舟・馬などに乗る、あるいは、飲食するの尊敬体であることはいままでもない。しかるに、英訳は、「源氏にお着せ申し上げた」という意にとれて、動作の主体が帥宮や三位の中将にある。したがって、つぎの「位なき人は無紋の御直衣、なかなかいとなつかしきを着給ひてうさやつれ給へる、ことめでたし」(p.502)を、ウエイリーは、He (Genji) reminded them (Sochi no Miya, To no Chujo) that he had resigned his rank and they brought him a cloak of plain silk without any crest or badge. (p.234) と訳し、帥宮や三位の中将が「無紋の御直衣」を源氏に持参しているのである。もっとも、ウエイリー自身が「奉る」の語義に未知でないことは、例えば、同じ『須磨』の巻で、「白き綾のなよやかなる紫苑色なと奉りて」(p.510)と云ふ一節を He was dressed in soft coat

of fine white silk with……と訳し得てゐるからわかるのだけれん、こはたんなる場面解釈の誤解であろう。

(7) 心をやりていふもかたくなしく見ゆ。(明石 p.622)

He now spoke in a gentler tone, but it was evident that he meant to have his own way,…… (p.250)

明石入道の物の言い方であるが、原文は「得意になつていふのも頑固らしくみえる」といふ意味。「心をやりて云々」は、he meant to have his own way であらうが、それがなせ a gentler tone と話さなければならぬのか。ここは、「かたくなしく見ゆ」という文脈から、入道の話振り、むしろ blunt-spoken の印象がよい。

(8) 月もたちぬ。ほどさへ哀なる空の気色に……(明石 p.676)

The seventh month had begun, and the summer weather was even more delightful than usual. (p.277)

「月もたちぬ」は、ここでは「八月になった」という意味。英訳①は失当であろう。②は当然陰曆による季節で、秋色濃い八月半ばの空の色なのであるが、「夏の天候は例年よりいっそう心地よいものだった」と、陽光燦々たる英国の風土に移しかえられて、すこぶる異和感を残すようである。もっともロンドンの七月の平均気温は十六・九度前後でさわやかではあるが、原作は夏のイメージではない。

c 「文脈」

文章の続きへあつとつうよりも主として主語・客語のとりちがえをこころでは問題とする。

(1) その心たがへさせ給ふな。(賢木 p.508)

I therefore entreat you never to act contrary to his advice.
(p.197~8)

崩御まぢかの桐壺院が朱雀帝に託す遺言の一節である。「その心」とは「わが心」すなわち桐壺の心むけをたがえ給うな¹の意である。しかるに、英訳で、冒頭の I は桐壺院、you は朱雀帝、したがって his advice の his は源氏とつうこととなる。「源氏の忠告にまかす」²と行動してはならぬ」とつうのであるから、全体の意味はこれである。が、あくまで原作の文脈に固執すれば、当然こころは「わたし³の忠告にまかす」とならなければならないことである。

(2) 人人の語り聞えし海山のありさまを、はるかにおぼしやりしを、御目近くては、げにおよばぬ、そのたまたまひ、になく書きあつめ給ひり。(須磨 p.610)

.....He now made good use of his opportunities and soon got together a collection of views which admirably illustrated the scenery of this beautiful coast-line. (p.247)

「書きあつめる」の主体は源氏であり、源氏みずからが描き・集めるのであつて、描かれた絵のコレクションを収集するのではな⁴く。

(3) 「…かくなしきめをなへ見、命つきなんとするは、前の世のむくい⁵か、此世の犯しか、神はとけあきらかにましき⁶なば、この愁く⁷やめたま⁸く」〜……(明石 a.6000)

Genji himself prayed again to the gods, saying: With such sighs and sounds about us we cannot but wonder whether the end of our days is come. Do ye now, O Powers, put an end to this grievous visitation, whether it be the fruit of Karma or the punishment of present crimes; lest we should doubt if Gods and Buddah can indeed make manifest their will. (p.257)

落雷・暴風雨に対して源氏の従者たちが立願するセリフであるが、右の箇所は、「帝王の深き宮に養はれ給ひて」ではじまる一節の終りの部分である。この部分に限って英訳は「源氏みずからが祈願した」ことになっている。なぜこうなったのか。察するに、問題はこれを承けたつぎの一節にある。すなわち、「みやしろのかたにむきて、⁹やまやまの願をたて、¹⁰又海の中の龍王、¹¹よろい¹²の神たち¹³に願たつて¹⁴せ給ふ¹⁵」とつづくのであるが、①「願をたて」とあるのは訳者の依拠する『湖月抄』のみで、他の諸本はすべて「願をたて給ふ」と一応こころで切れ

ている。したがって、『湖月抄』本文に関するかぎり、ここは源氏の従者たちが「願を立て」で、中止形となり、「別に又源氏が、……お立てになられた」と解釈され、途中で主語が入れかわってやゝ複雑な文脈である。ウエイリーは①の中止法、②の敬語法によりこの立願の行為者を源氏一人にしてしまったものと思われる。「願をたて給ふ」で切れたならばこういうことにはならなかったであろう。ちなみに、①の「たて給ふ」は、願をたてるの補語である「住吉の神」に対する敬語であって、動作の主体たる従者たちに対するそれではない。

(4) うしろのかたなる大炊殿とおぼしき屋に移し奉りて、(明石 p.638)

Finally Genji got them to move his things into a sort of shed at the back of the house, which had sometimes been used as a kitchen. (p.257)

「源氏をお移し申し上げた」であるのに、英訳では、「源氏が従者たちに自分の持ち物をうつさせた」となっている。

(5) さるは、「ながむらんおなじ雲をながむるは思ひもおなじ思ひなるらん」となん見給ふる。いとすきずきしや」と聞えたり。(明石 p.660~1)

'She has however ventured to compose the following poem, which she bids me communicate to you: (poem omitted) She is, as you will observe, deeply affected by the arrival of your

message. Pray do not think her answering poem imperpetently bold.' (p.269)

「さるは……見給ふる」は明石入道が娘の心を推しはかり、源氏への返事を代作したのである。「いとすきずきしや」は周到な訳で恐れ入るが、ともかく右の歌は入道女の作ではない。

d 「改訳」

原文の内容との距離があまりにもはなはだしい例を若干挙げる。

(1) をいこは、うしつらしと思ひ聞え給ふことかぎりなきに、来しかた行く先かきくらす心地つ、うし心も失せにければ、明けはつたけれど、出で給はずなりぬ。(賢木 p.520)

Meanwhile Genji, in a frenzy of irritation and disappointment, scarce knew how he came to be in her ante-chamber nor thought how he was going to retire from it. So completely had he lost all sense of real things that though broad daylight was come he did not stir from where he stood. (p.204)

(2) かんの君は、人わらへにいみじう覚しくつはるるを、おとやぐとかなしうし給ふ君たつ……(須磨 p.606~7)

The Emperor still showed no signs of summoning Princess Oborozuki to his side. Her father imagined that she felt her position and, since she was his favorite daughter,……(p.245)

(3)をやみなかりし空の気色、名残なくすみわたりにて、漁りする海人
 とき誇らしげなり。(明石 p.648)

The bad weather in which for so many weeks there had not
 been a single break, had now completely vanished. Out came
 all the fishing-boats, eager to make up for lost time. (p.262)

(4)君はすきのなまやとおほせど、御直衣奉りひきつくるひて、夜ふ
 かしていで給ふ。(明石 p.667)

Genji at once understood that this was an invitation to the
 house on the hill. Suddenly what had seemed impossible became
 perfectly simple. He set his cloak to rights and left the house.
 (p.272)

改訳かならずしも改悪ではないが、原文の趣きからいささか飛躍し
 すぎた例。①は、「過去も未来も真っ暗になって」という意味であっ
 て、心情の惑乱が時間の上で意識されていて、『源氏』にひんぱんに
 出てくる文例でもある。これを「どうして自分は彼女の臥床(控え室)
 にはいるようなことになったのか、ほとんど知るよしもなかつたし、ま
 たどうやってそこを出るかについても思い及ばなかつた」とするのは
 いからであるう。あるいはこう訳してみると、最後の「いで給はずな
 りぬ」 he did not stir from where he stood. が緊密な因果関係の
 うちにとらえられて面白いが、やはり「来しかた行く先」は源氏が過
 去と将来に茫然として自失する意にとったほうが隠当ではなからう
 か。(2)はむしろ「かんの君＝朧月夜」の悩乱の原因を原作の本文に関

係なく付加したとみるべきであろう。なぜなら「朱雀帝のお召しの気
 配がない」から、かんの君は「いみじう覚しくづぼるる」のである。

(3)は嵐去って海人たちが嬉々として得意そうな様子を叙したものであ
 るが、「埋めあわせをする……」となっている。(4)は源氏が明石入道の
 女のところへ出かける自分を「すきずきしきさま」と自覚するところ
 であるが、その心理描写を英訳は、「源氏はたちどころにこれは岡辺の
 家への招待であることを悟った。とつぜん不可能とおもわれていたこ
 とがまったく簡単なことになった」とするのである。(1)から(4)までの
 例をみてみると、源氏物語がしばしば写実主義だといわれるにもかか
 わらず、作中人物の感情は何ら具象性を帯びることなく、そのイメー
 ジ——おもかげ——ばかりが髣髴するだけであるが、一方、英訳はこ
 うした王朝語法の特徴を大胆に切りすてて、具体的な言動を補足して
 場面をいきいきとさせる努力の跡が随所にみられるのである。

III 『歌の訳し方』

a 「韻文形態」

(1)たち花の香をなつかしみほととぎす花散里をたづねてぞとふ(花
 散里 p.566)

Presently he handed to her this poem:

'It is the scent of orange-trees that draws the cuckoo to the
 village of falling flowers.' (p. 227)

(六条御息所歌)

(2)おほかたの秋のあはれも悲しきに鳴く音なそへそ野辺の松虫(賢
 木 p.501)

She recited the verse, 'Sad enough already is this autumn parting; add not your dismal song, O pine-crickets of the moor.' (p.194)

(源氏歌)
 (3) 恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風やふくらん (須磨 2.606)

he sang to himself the song:

'The wind that waked you,

Came it from where my Lady lies,

Waves of the shore, whose sighs

Echo my sobbing?' (p. 246)

「韻文形態」にもいろいろあり、(1)のごとく、「彼は彼女にこの詩を与えた」として一首の大意を会話の中にもりこんだだけで、韻文とはいえないものから、(2)のごとく、「詩を朗誦した」として、ほぼ原意に忠実に韻文形態をとっているもの、この二つの方向が本稿の対象たる部分には圧倒的に多い。これは対話体の散文にしなをつけて歌たるゆえんを示したにすぎないもののように思われる。また、歌がかならず詩でなければならぬ時は、(3)のごとく、しばしば行を換えて詩的スタイルに配列されるが、ここではこの他に一例しかない。かかる形態のよって来る必然性は、地の文に「……とうたひ給へるに」とあって、源氏自身の朗吟で会話の要素がまったくないためである。したがってかならず詩的形態に訳さねばならぬ場合は以上のごとく地の文がこれをうながすからに他ならない。もっとも、引詩、すなわち漢詩

の引用は引歌の場合とやや異なっていくわしく訳出されている。例えは、

(4) 「酔のかなしみの涙そそぐ春のさかづきのうち」と、諸声にずじ給ふ。(須磨 2.629)

……they murmured in unison the words of Po chü-i's parting poem:

'Chin on hand by the candle we lay at dawn

Chanting songs of sadness, fill the tears had splashed

Our cup of new-made wine……' (p. 252)

(5) 「……風にあたりていばえぬければ」など申し給ふ。(須磨 2.628)

But I beg of you to accept it as a symbol of my longing to return, for in the *Old poem* it is written:

'The Tartar horse neighs into the northern wind;

The bird of Yüeh nests on the southern bough" (p. 252)

(4) は『白氏文集』巻十七、醉悲灑^{シヤク}涙春盃裏^{ツクシ}をよみ下したものが、つぎの「吟苦文^{シヤク}頤曉燭前^{ツクシ}」まで訳して周到である。(3) は、はるばる都から須磨にたずねて来た三位の中將に黒駒を贈る時の源氏のつばやき。都恋しさにさりげなく暗示された漢詩は、『文選』巻十五古詩十九首中の「胡馬依^{ウマ}北風^{キツ}越鳥巢^{ウマ}南枝^{キツ}」であり、これを「胡馬嘶北風云々」(『河海抄』)と改めて用いたのである。訳は(3)と同じく、越鳥

以下(訳) Tartar horse, bird of Yüeh. 異國情緒もたかむる。

b 「会話形態」

(源氏歌)
秋の夜のつきげの駒よわがこふるくもるにかけれ時の間もみん(明石 p.698)

'O thou, my milk-white pony, whose coat is as the moon-beams of this autumn night, carry me like a bird through the air that though it be but for a moment I may look upon the lady whom I love!' (p. 273)

和歌による消息、応答はここではaの(1)(2)の形態が圧倒的で二人の対話という形では、めずらしくでてこない。右の例も源氏の問わず語りである。この一首を詠んで「……と打ちひとりごたれ給ふ」とあるから、訳もこれに忠実なままで、ずいぶん莊重な独白となっている。他にこの項に属する例は、非常にその数が少ない。もともと『源氏物語』の和歌は、近代小説における会話の部分に匹敵するものであるから(時枝誠記博士『古典解釈のための日本文法』など)、かかる会話形態の訳はもっと多くを望んでよいのではあるまいか。

c 「叙述形態」

(明石上歌)
なほざりにたのめおくめるひとことをつきせぬ音にかけて忍はん(明石 p.680)

She answered with an acrostic poem in which she prophesied

that this loan was likely to remain for ever on her hands (p.278)

in which 以下で歌意を要約している例である。この際 this loan は of course he must not loose her! と訳って渡した琴 zithern であるが、いとも簡単にかたづけられている。他の場所では歌は a b c の三形態はぼ等量に訳し分けられて筋の進行に、感情の流れに、変曲折があつて多彩だが、ここではcの形態もこの一例をみいだすのみである。

VI 『欠訳』

訳を明らかに欠いている箇所をひろうと、ある意味では、I a の縮約化の例と重複してしまうので、ここでは大はばに削除され、しかも問題となるべき部分にのみ注目する。

(1) 『月かげはみし世の秋にかはらぬをへだつる霧のつらくもある哉』かすみも人のか、むかしも侍りけることにや(賢木 p.538~9)

(2) 『伊勢島や汐干の渦にあさりてもいふかひなきは我身なりけり』ものを哀と覚しけるままに、うちおきうちおきかき給へる、(須磨 p.604)

(3) 『初雁は恋しき人の列なれや旅の空とぶこゑのかなしき』とのたまへば、良清、「かきつらね昔のことぞおもほゆる雁はそのよの友ならねども」、民部大輔、「心から常世をすてなく雁を雲のよそにも思ひけるかな」。(須磨 p.611)

(4) 御供の人みな涙をながす。おのがじし、はつかなる別をしむべか
 めり。朝ぼらけの空に、雁つれてわたる。(源氏)あるじの君、「ふるさと
 をいづれの春か行きてみんうらやましきはかへる雁がね」(頭中将)宰相さ
 らに立ち出でんこちせで、「あかなくにかりの常世を立ち別れ花
 の都に道やまどはん」。(須磨 p. 626 ~ 627)

(5) ……といふをさき給ふも、いと心ぼそしといへばおろかなり。

(源氏歌)「海にます神のたすけにからずば汐のやほあひにさすらへなま
 し」。(明石 p. 639 ~ 640)

(6) 浪の声、秋の風になほひびきことなり、塩やく烟かすかにたなび
 きて、とりあつめたる所のさまなり。(源氏歌)「此たびは別るとももしほや

く煙はおなじかたになびかん」とのたまへば、「(明石上歌)かきあつめあまの
 たく藻のおもひにも今はかひなきうらみだにせじ」哀にうち泣き
 て、こと少なるものから、さるべきふしの御いらへなどあさから
 ず聞ゆ。(明石 p. 678)

(1) から (6) まではずべて歌を含むものである。(1) は、藤壺中宮の歌を
 うけた源氏の独詠である。源氏のうらみはこの前の「御けはひもほの
 かなれど、なつかしう聞ゆるに、つらさも忘れて、先なみたぞおつ
 る」とあるから、十分読者に伝わって特に右一首を必要としない。(2)
 は、六条御息所の源氏に贈った二首連作の後の方で、彼女のなげきを
 重奏する煩をきらったのであろう。(3) は、「須磨には、いとど心づくし
 の秋風に」ではじまる一節で、名文の代表とされているところに出て
 くる源氏・侍臣の和歌連作の場面である。源氏・良清・民部大輔・右

近丞と、四人連作の趣向であるが、ウェイリーは最後の右近丞の歌の
 みをとりあげ、しかも場所をかえて彼の行動と決意をしるした、「親
 のひたちにくだりしにも、さそはれで、まゐるなりけり。したには
 思ひ碎くべかめれど、誇りかにもてなして、つれなき様にしありく」
 という文の後に訳してつけくわえている。思うに、四首羅列は単調に
 失するものと判断されたのであろう。しかし、この和歌連記に際し
 て、序次連接に配った原作者の苦心には並々ならぬものが予想され、
 五十嵐力博士によると、第二首目が惟光ではなく良清であるのは、彼
 が播磨守の子で須磨に最もゆかりがあるからで、また第三の惟光の後
 をうけて、最後の右近丞の作の意義については、「いかにも筆力千鈞
 の、重い結尾ではないか、主君がさすらいの旅愁に始まり、それに喚
 びさまされた近侍二人が現在の悲境の自覚に央ばし、而して陽気な青
 年崇拜者が眼前の親睦融和に見出した意義深き慰めに終る。吾等は之
 れを見て、立派に秩序立てられた哀史一章を、わざと断叙して豊かな
 余意を見せたかのように思うのである」(『平安朝文学史』下巻)と
 述べられている。『源氏物語』のこうした、『伊勢物語』以来の歌物
 語の発想の場面を読みくだくためには、われわれはもはや一首一首の
 間の空白を読まなくてはならない。英訳はおそらく至難であらう。
 英訳によって失われる部分はおそらくこのような条である。(4) は、こ
 の直前に、源氏と三位の中將との間に漢詩の唱和があるので、ここで
 ふたたび和歌の唱和の必要をみとめなかったのであろう。(5) は、源氏
 の独白である。歌の前の「いと心ぼそしといへばおろかなり」で源氏
 の不安は十分伝えられる。(6) も和歌の省略である。

以上述べてきた欠訳は、すべて和歌の重複で、感情のオーバーがめ

だつところであり、これを欠訳に付しても原意はそこなわれないが、この他に、場面を大幅にわたって切って捨てたところもある。例えば、(7)、p.612から613にかけて、「月いとはなやかにさし出でたるに」から「ひだりみぎにもぬるる袖かな」までは、先きの(3)に続く八月十五夜の管絃の遊びの場面である。ここには『白氏文集』巻十四中の有名な七律「二千里外故人心」や『菅家後集』「九月十日」の絶句、「恩賜御衣(今在此)」などでて来て、「眼前の風景に古典的・異国的な深さと広さをあたえている」(岡一男博士『源氏物語評釈』)シーンであるから、ここを省略したのは遺憾とすべきであろう。同様の例は、(8)、p.618~621の「ところにつけてはよろづのことさまかはり」から、「家にあからさまにもえ出でざりけり」まで、源氏の歌三首を含むが、それよりもこの部分には雪の降りしきる凄絶な夜に従臣たちとの琴の合奏、さらには王昭君の故事などがちりばめられ、すこぶる興趣をそそる一節であることから、ここを欠いたのも(7)と同様惜しまれよう。

こうした欠訳は他所にも多く点在するが、それはストーリーの進行を明確にしても、ついにはこの物語独自の深い心理の陰影や、作者の内外にわたる古典的教養などをかき消してしまうことになりかねない。その功罪についてはここではふれず、ずっと後の段階で改めて言及するつもりである。

以上、前回と同じ角度から『ウエイリー源氏』の特色を検討したが、この翻訳の独自性については云々するのは全巻を見渡してからのことにした。

(未完)

補遺 (Supplements) (紙幅の関係で全文は掲げない)

I 適訳

a 解釈—拡大化—

- (1) 北のたいのきるべき……けはひ聞ゆ。(賢木 P. 496~7)
He hurried to …… frivolities. p.192
 - (2) ちやこの人も……心にくし。(賢木 P. 497~8)
At first she pleaded …… to meet him. p.193
 - (3) 「こなたはすのこばかり」……ゐたまへり。(賢木 P. 498)
"I presume that …… seat there. p.193
 - (4) ふじの御衣……つけても。(賢木 P. 510)
Despite …… required, …… p.199
 - (5) かりの御衣など……ちし給ひて。(須磨 P. 592)
She hardly knew …… travelling clothes. p.240
 - (6) 二方に御修法など……申し給ふ。(須磨 P. 599)
The liturgy of intercession …… as before. p.242
 - (7) 「生ける世」とは……ちひちあつん。(須磨 P. 608)
That poet was a fool …… he was gone. p.245
 - (8) 二条院のあはれなし……なほことなり。(明石 P. 647)
He had tried to …… sold his page. p.262
 - (9) 京よりも……おほかり。(明石 P. 650)
About this time …… constant stream. p.264
 - (9) みちのほどち……おもなぎぬへくおほす。(明石 P. 667~8)
The house stood …… to the capital. p.272~3
 - (10) 京よりも……入道なみだくれて。(明石 P. 676)
… deputations from the Capital …… were lodged. p.277
- 縮約化 —
- (1) じでかてに、御手とらへて……なつかし。(賢木 P. 500)
… aghast to leave her …… in his. p.194
 - (2) おほかたの……ちらめじうらみ給へて。(賢木 P. 535)
In her reply …… wounded him. p.211
 - (3) 「ひちつき程に……」…あはれなれ。(須磨 P. 573)
This delighted …… their emotion. p.230
 - (4) わかやかに……思ひざるべし。(須磨 P. 605)

The man was a young Genji said: p.224

(5) かたじけなく.....ながめへらじ給ふ。(須磨 P. 626)

This was the poem the shore. p.253

b 心理分析的

(1) くやしきこと.....にながめ給ふ。(賢木 P. 501)

He knew that reckless weeping. p.194

(2) 朝夕にみたてまつる.....あふかならん。(賢木 P. 516)

To look upon to her charms. p.202

(3) ちひむたさ.....なまめかじ。(賢木 P. 547)

The ice on the lake so beautiful. p.217-8

(4) 「聞えおせまほしめ.....思あたまくながら」(須磨 P. 578)

Touched by her concern at like to say, p.232

(5) 月おほむにちごじゆ.....まほしやのさ(須磨 P. 583)

The lack in front of the ,more inaccessible! p.235

(6) 入道も人しれず.....かじごにまん(明石 P. 660)

Anxious to be company. p.268-9

(7) 二条院の君.....書き給ひつ(明石 P. 672)

Genji would not than even before. p.274-5

(8) ちやかたもあらず.....まほしなりぬ(明石 P. 677)

He had never before at Court. p.276

II 不適訳

a 解釈

(1) 九月七日ばかりなりぬれば.....^①たぢながらと.....^②いとあまりうもれ

らたきぞ.....まよおごえ給へり。(賢木 P. 495)

It was the seventh of the ninth month.....^①even if it were only at

the moment of her departure,..... she was acting very imprudently,

she could no longer fight against her longing once more to see

him and sent word secretly.....behind her screen-of-state. p.191-2

(2) べはじつじつひにひかへて.....^③あふかへてや。(賢木 P. 546)

In his letter, he touched.....I regret that they must be omitted. p.217

(3) こゝに右まきてけり。(賢木 P. 553)

The 'right' won easily. p.220

(4) 「.....ととよ夜をかう出ひおせ給ふなるも.....し侍るかな」(須磨

P. 577)

It is kind of you to have paid us.....that is now so changed. p.232

(5) 大殿の三位中将は.....世の中らよめもあなへ。(須磨 P. 624-5)

He had been put down again into discouraged. p.251

(6) 弟子共にあはせられ.....出ひつ(明石 P. 684)

One night his disciples.....the moonlight. p.251

c 文脈

(1) むすめ住ませたるかたは.....開けたり。(明石 P. 668)

The part of the house He opened it. p.273

(2) いしつか.....ものはじめにみるかな。(明石 P. 684)

He went about muttering himself: unhappy..... p.280

d 改訳

(1) 殿におはしたれば.....あたましとのみ世を思へるけしきなり。(須磨 P. 579)

When he reached his own palace heads again. p.233

III 欠訳

(1) この院のみこたちは.....女房などはなうちかみつゝ、所々にむれあ

り。(賢木 P. 543)

(2) 「ながめかる.....ときこえたまへば」——「ありしよの.....こぼれ

給ひぬ」。(賢木 P. 548)

(3) かの君は.....しぬへくおぼさる。(賢木 P. 558)

(4)はなごゑにて.....思へり。(須磨 P. 578)

(5) とりそへて.....なきあへり。(須磨 P. 579)

(6) 「わりなくてためらひ給ふ御けしきなり。」・「いみじき御心.....此

世のうちにはまおれる」(須磨 P. 588-9)

(7) 松しまのあまのたまも.....くらされ給ふ。(須磨 P. 598-9)

(8) 御様子のゆゆしう.....給はず。(須磨 P. 610)

(9) ちうじのことおぼし出でられて.....おほかり。(須磨 P. 624)

(10) いとはなく大官人の.....きにけり。(須磨 P. 624)

(11) 多くたてつる願の力なるべし。(須磨 P. 631)

(12) 入道.....はなれぬ。(明石 P. 682)

(13) 都.....大さじや。(明石 P. 682)